

## 常任委員長賞

### 「正義」という名の刃 西池袋中学校 榎本 眞子

「善いことをしましょう」「悪いことはやめましょう」幼い頃から聞き飽きたこの言葉が最近とても無責任な言葉に聞こえる。そもそも「善」とは何だろう。困っている人に手を貸すことか。ルールを守ることか。では、その「善意」が誰かを追い詰めたり、特定の誰かを傷つけたりしているとしたら、それは本当に「善」と呼べるのだろうか。私たちが無意識に振りかざしている「正しさ」の正体について、私は考えてみたいと思う。

上辺だけの正論が溢れているこの社会では、いつも「正しい側」にいる人が一番強く、そうでない人達を裁く権利を持っているかのように振る舞っている。学校でもネットでも、ルールを守っている側がそうでない側を一方的に叩き潰す光景が溢れている。最近、SNSなどで目にする「ネット叩き」などは、その典型的な例だ。彼らは決して「悪意」だけで動いているわけではない。むしろ「ルールを守らない奴を許さない」「社会のために正さなければ」という純粋すぎるほどの「善意」から行動している。しかし、その正義感によって一人の人間が再起不能なまで叩きのめされる姿は、果たして「明るい社会」と言えるのだろうか。

私自身、そんな「正しい言葉」に深く傷ついた経験がある。小学生の頃、何をやっても上手くいかず、自分なりに必死でもがいていた時期があった。そんな時、周りの大人や友達からかけられたのは、「頑張れ」という言葉だった。相手は私を励まそうとして、百パーセント善意で言ってくれたのだと思う。でも、その言葉を聞いたたびに、私は胸が締め付けられるような思いがした。私を救うはずの「頑張れ」という善意の言葉が、その時の私には「今のままの君ではダメだ」と突き放される刃のように感じられたのだ。

良かれと思って投げた言葉が、相手にとっては石を投げられるのと同じ痛みを与えることがある。私たちは「自分が正しい」と信じているときほど、他人の本当の姿が見えなくなり、残酷になれるのだ。

一方で「悪」とされるものについても考え直したい。犯罪を犯した人やルールを破った人を私たちは簡単に「悪」として切り捨てる。しかし、彼らがなぜその道を選んだのか、その背景にある孤独や絶望に目を向けたことはあるだろうか。もし、彼らの「悪」の出発点が私たちの「無感心」や、綺麗事だけで塗り固められた「正義」による排除にあったとしたら。「あいつは悪い奴だから排除して当然だ」と境界線を引く行為こそが、社会を暗く、冷たい場所にしているのではないだろうか。

社会を明るくするために必要なのは誰かを裁くための強固な「善」ではない。自分の正しいと考えることを疑い、相手の背景を想像することだと思う。「自分が正しい」と確認した瞬間に、私たちは他人に対して残酷になる。だからこそ、自分の善意が相手を傷つけてないか、一度立ち止まって考える。そして過ちを犯した人をただ突き放すのではなく、「なぜ」を共有し、再び手をつなぐための隙間を用意しておく。

完璧な正義で埋め尽くされた眩しすぎる世界よりも、お互いの弱さや過ちを許し合える、少し不完全で温かい場所。そんな誰一人として「正しさ」というナイフで切り捨てられない社会こそが、本当に明るい社会なのだと私は信じている。

「正義」は誰かをやさしく照らす光になると同時に、誰かを傷つける刃にもなることがある。だから私達は自分の「正義」が相手にとっての「正義」か一度立ち止まって考えることが大切だ。そう考えることのできる人間が増えれば、社会は自然と明るくなるはずだ。だからまず私が「正義」という刃をそっと手

から離して、私だけでなく、みんなが思う明るい社会を手を取り合い、創っていきたい。